京都の災害をめぐる

京都大学防災研究所所長
橋本　学　監修
大邑潤三
加納靖之　著

原寸内容見本

さあ、京都の災害探検に出かけよう！

A5判・並製本・128頁
フルカラー
定価：本体1,600円＋税

●本書特設ページ
https://www.chiisago.jp/kyoto-saigai/

小さ子社

本文見本

記録されたものも多数あり、その一部はこの本のなかでも紹介しています。原文で読んでみたい方は、いちど資料館を訪ねてみてはいかがでしょうか。

地震

31 下御霊神社

『かなめいし』には**寛文の地震**（1662）の時、下御霊神社で子ども灯籠に打たれて亡くなったとの記事があります。地震のあった日は境内で神事おこなわれており、多くの人がいましたが、地震の揺れで大騒ぎになり、石灯籠に抱き着いた7、8歳の子どもがその下敷きとなって悲惨な死に方をしたと記されています。

史料・歴史用語、固有名詞には丁寧にルビをふり、過去の災害や、地震現象・測量について解説したコラムも充実しているので、中学生以上の防災や歴史の学習にも最適

地震

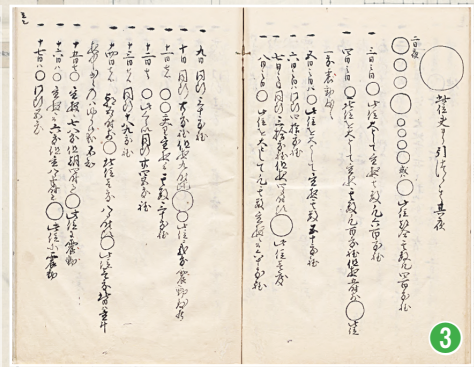
32 行願寺（革堂）

行願寺（革堂）はもともと一条通にありました。『日本紀略』には永祚元年（989）には鴨川の氾濫で倒壊したとあり、その後十数回火災にあったようです。『甲子夜話』続篇巻之四十九によると、**文政の地震**（1830）では革堂前で6[illegible]人が下敷きになりましたが、怪我だけで命は助かったそうです。

防災・学習

33 銅駝の水

銅駝会館の南の道に面して蛇口があるのをご存知でしょうか。この水は防火用の水として利用できるよう地下水を汲み上げているものです。しかしずっと見ているとタンクを持った人々が絶え間なく訪れ水を汲んでいきます。この水は「銅駝の水」という地元では有名な名水で、テレビでも紹介されたことがあります。いざという時の防火用水として、また非常時の飲み水として利用できるよう、保全していかねばなりません。



『天保雑記』廿三（国立公文書館／国立公文書館デジタルアーカイブ）

西御門

地震

❶ 液状化

文政の地震（1830）のとき、二条城では液状化が発生したようです。『甲子夜話』巻之四十九には「壱尺斗地破、其われより砂吹出、一時斗黒煙に相成、実に恐敷事にとあります。泥水の黒い水しぶきが勢いよく吹き出し、黒煙のように見えたのでしょうか

→【コラム9】地震と液状化現象 121頁

地震

❷ 塀・石垣

二条城の塀や石垣も**文政の地震**（1830）で崩れています。『**浮世の有様**』巻之三は西御門の下の石垣が10m以上にわたって堀の中に崩れ込み、崩れる音は雷のようだったと記しています。また同所の石垣が90cmほど地中へ揺り込んだともあります。南側の石垣も全体的に20cmほど揺り込み、石垣の途中で所々石が飛出ていたようです。また高塀が倒れたため城内が丸見えになっていたようで、『**文政雑記**』は土塀や石垣が外堀にたおれて水が溢れ出たために、所司代屋敷の前の通りが浸水して通行できないほどであったと記しています。

地震

❸ 番衆小屋

二条城内には二条在番として江戸からやってくる旗本の家来たちが住む、東西の番衆小屋がありました。『宝暦現来集』巻之十九や『甲子夜話』続篇巻之五十三に所収されている**文政の地震**（1830）での二条城の破損を記した記録には、東番衆小屋49軒のうち3軒ほどが倒壊に近い大破の状況で、そのほかの小屋も大破したとあります。西番衆小屋はそれよりも被害が大きく、49軒のうち2軒が倒壊し15軒ほどが倒壊に近い大破、残りも屋根などが大破したようです。西番衆小屋は盛土の厚い二条城の南側にあたっており、大きく揺れた可能性があります。南面

京都御所と二条城は特集ページで

建具をはずし、土壁を落として水流を受け流したために無事であったといいます。こうした災害への知恵はたびたび水害に見舞われてきたこの地域ならではの文化でしょう。舟運が盛んな地域であったため被災後はしばらく舟で生活を送ったそうです。本水害では桂川、宇治川、木津川の三川が合流する地点で水が滞り逆流現象が発生したため、流失した家財道具などは桂川の上流に流れ着いたそうで、上流の村々から送り返されてきました。当地区の墓地には当時の戸長（現在の町村長）であった勝山弥兵衛の顕彰碑が建っており、この水害からの復興に尽力したことが記されています。水垂地区は明治の淀川改良工事や平成の桂川の拡幅事業で2度の集落移転を迫られ、現在に至っています。

→142 與杼神社

参 浅井良亮ほか「京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事」、大邑潤三「水垂の地形と淀水害史」

風水害

138 淀小橋

明治の水害（1885）では、桂川に架かる多くの橋が流失しました。そうしたなかで淀小橋では橋の両端に舟を置いてこれに水を満たし、大きな石を橋の上に並べるなどの対応をしたために、橋が浮き上がることなく流失しなかったといいます。

参 浅井良亮ほか「京都市淀、水垂・大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事」、大邑潤三「水垂の地形と淀水害史」

風水害

139 納所町

明治18年（1885）7月5日の『日出新聞』によると、**明治の水害**（1885）のとき、淀川の逆流により納所村の倉庫にあった久世郡役所の貯蓄米が浸水する恐れが発生しました。避難民に配る米が流失してはいけないため、これを救出しようとして大きな舟に移そうとしたところ、淀小橋の下手で舟が激流に巻き込まれそうになりました。船員は淀小橋に飛

防災・学習

174 京都府立山城郷土資料館（ふるさとミュージアム山城）

南山城地方の歴史と文化を調査研究しています。常設展・企画展・特別展のほか各種講座が開催されています。

地震

175 瓶原

伊賀上野地震（1854）では、京都府南部でも大きな被害が出ています。木津川市加茂町の瓶原では、液状化被害が発生したと思われる記録があります。伊賀上野地震という名前からすると、三重県側で被害が大きかったように感じるかもしれませんが、震源は三重、奈良、京都の県境付近とされています。木津川沿いの地域で土砂災害や液状化被害が広く見られました。

↓【コラム9】地震と液状化現象 121頁

地震

176 海住山寺

木津川市の海住山寺には、**寛文の地震**（1662）で被害を受けた記録があります。『海住山寺古書』には「同（寛文二年）五月朔日大地震越月不止、依之塔婆傾コト如前瓦水煙破損ス、直之」と書かれています。現在国宝に指定されている五重塔にも被害があったのでしょうか。

なお、2018年6月の大阪府北部の地震では五重塔の相輪の一部が破損し落下しました。

風水害

177 災害記念塔

南山城村北大河原北垣内に**南山城水害**

東山

Web地図へ

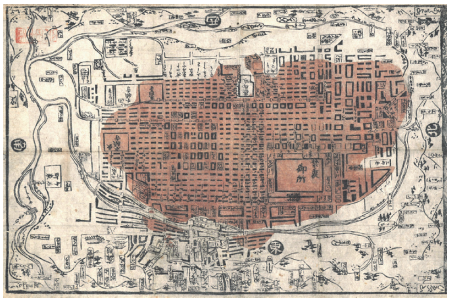
37 鳩居堂
35 檀王法林寺裏門前
36 三条大橋
三条通
三条京阪
三条
東山
42 白川橋
地下鉄東西線
コラム3 三条柳馬場で地震を体験した武士の話
御所・左京南部 p 24
富小路通
麩屋町通
御幸町通
寺町通
高瀬川
河原町通
縄手通
古門前通
新門前通
白川筋
102 白川
101 観亀神社
花見小路通
京阪本線
神宮道
97 知恩院
98 知恩院前
師弟愛の像
八坂神社
四条大橋
104
四条通
河原町
103 仲源寺
祇園四条
綾小路通
団栗橋
105 団栗辻子
仏光寺通
建仁寺
84 永養寺
高辻通
宮川町通
106 恵比寿神社
東大路通
96 将軍塚
松原通
107 松原橋
大和大路通
八坂通
万寿寺通
85 樋口富小路（万寿寺通富小路）
東山区役所
松原通
108 森下町
清水五条
五条通
N

まち歩きに便利な地図を、9つのエリアの冒頭に掲載 Webとも連動

1788年 天明京都大火

＊本文では「天明の大火」と表記

天明8年（1788）正月晦日の朝5時頃に鴨川の東の団栗辻子から出火し、およそ2日間にわたって燃え続け、京都市街地のほぼ全域が焼失した大火。京都三大大火と称される宝永、元治の中でも最大級の被害であった。鴨川を越えた火は強風に煽られて急速に延焼を拡大させ、刻々と風向きが変化して焼失範囲が拡大した。被害は、焼失家数36、797軒、竈（世帯）数65、340軒、寺院201か所、神社37か所、武家屋敷67か所、死者150（一説には1、800余）人とされている。おおまかな焼失範囲は、東が鴨川、西が千本通、南が六条通から五条通辺まで、北が鞍馬口通の範囲、鴨川の東に関し川沿いの四条通から五条新地から三条通の一帯であった。



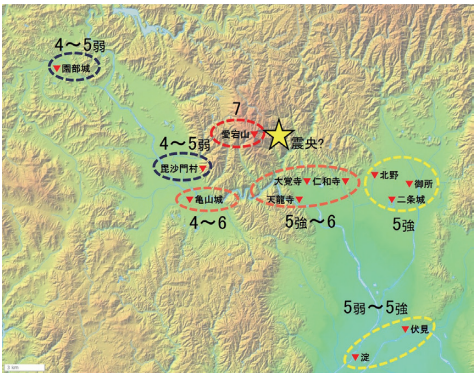
「京都洛中洛外大絵図」（京都市歴史資料館蔵）

近世以降に京都を襲った主な災害10件の概要を巻頭で紹介

1830年 文政京都地震

＊本文では「文政の地震」と表記

文政13年（1830）7月2日の15～17時に発生したマグニチュード6・5程度と考えられる内陸地震。京都市中では一部で家屋がまとまって倒壊したり、多くの土蔵に被害が発生した。亀岡では亀山城や城下町が広がる段丘上では被害が少なかったが、柏原などのそれより一段低い地域で家屋の倒壊が集中して発生している。被害程度や地鳴りなどから、愛宕山付近が震央と考えられる。余震が長く続いたことなどもあり、この地震を契機として文政13年12月10日に天保に改元されている。『山吉成卿記』（宮内書陵部蔵）に他の元号として、「寛安」、「嘉延」、「たことがわ



文政京都地震の震度分布（大邑潤三作図）

Column 9

地震と液状化現象

地震の際にたびたび発生する地盤の液状化現象。地震の強い揺れによって、地下の水を含んだ地層が流体のようになり、地盤の弱いところや井戸などの人工の通り道を通って地上に吹き出したり、上に乗っている地盤や建物ごと移動したりします。２０１１年東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）や２０１８年北海道胆振東部地震の際にも、液状化現象による被害が発生し大きな注目を集めました。

この液状化現象が人々の知るところになったのは、１９６０年の新潟地震とされています。では、液状化地震は新潟地震からしか確認されていないのでしょうか？　そんなことはありません。むかしの人々も液状化現象を体験し、さまざまに書き残しています。たとえば、地震の際に「田から泥水が吹き出した」「その泥水は異様な臭いがした」などというものです。「伏見・淀」エリアで紹介した岡山藩伏見屋敷での液状化なども、そのよい例です。

液状化現象は、史料だけでなく地面にもその痕跡を残します。遺跡の発掘現場から液状化の痕跡が検出されることがあるのです。現代の地震の際にみられる地表に噴出した泥砂や、泥砂で埋まった流路がそれを供給した地層につながっている様子が観察できます。細く脈状に残っている場合は、砂脈と呼ばれることもあります。いずれも、その地点が過去震で強く揺れたことの証拠になります。考古学的な分析によって、上下の地層年代を推定できれば、その液状化を引起こした地震の年代も推定できます。このように、考古学的な手法を用いて過去の地震を調べる研究分野を、地震考古学といいます。

ある地点での液状化の発生しやすさ（しにくさ）は、地盤と地下水面の条件、そして地震による揺れの強さによって決まります。海や川、湖沼などを埋め立てた場所や、過去に河川が流れていた場所などは液状化が発生しやすい傾向があります。自治体によっては、ハザードマップのひとつとして地域ごとの液状化しやすさを地図で発表しているところもあります。身近な場所の液状化の可能性について、あるいは、過去に液状化現象が見られたかどうかについて、いちど調べてみてもよいと思います。

防災学習に役立つ
コラムや図版も
充実

液状化剥ぎとり標本（八幡市立ふるさと学習館蔵）

京都の災害をめぐる　2019年10月発行　ISBN 978-4-909782-03-8
発行　小さ子社
〒606-8233 京都市左京区田中北春菜町26-21　電　話 075-708-6834　ＦＡＸ 075-708-6839
E-mail info@chiisago.jp　https://www.chiisago.jp

見本